

特別なニーズをもつ子どものサポートを通して

# 多様性を認め合う 共生社会をつくる



チャイルド・リサーチ・ネット 所長

榊原洋一先生

(さかきはら・よういち)

医学博士。チャイルド・リサーチ・ネット所長。お茶の水女子大学名誉教授。ベネッセ教育総合研究所常任顧問。日本子ども学会理事長。専門は小児神経学、発達神経学、特に注意欠陥・多動性障害、アスペルガー症候群などの発達障害の臨床と脳科学。

「発達障害」という言葉がひとり歩きし、  
保育の現場に不安が広がっている



発達障害の子どもは  
経年で増加しているわけではない

最近、保育関係者から特別なニーズをもつ子どもの数が増えていると聞くようになりました。一般的に発達障害といわれる子どもを指しており、「第3回幼児教育・保育についての基本調査」でも、多くの園がそうした子どもがいると回答しています（P.6 図7）。

これまでの調査から知的障害や視覚・聴覚障害、肢体不自由といった、以前から認知されていた障害をもつ子どもは2%程度であることがわかっています。また、小学校を対象とした調査から、それら以外の発達障害をもつ子どもは普通学級の6~7%程度だとされています。就学前は統合保育が原則ですから、これらを足すと8~9%となり、1クラスが30人であれば、平均して2~3人の特別なニーズをもつ子どもがいるということになります。

ただし、以前と比べて数が増えているかという点、多くの調査結果から変化がないことが明らかになっています。にもかかわらず、増えたと感じるのにはいくつかの理由が考えられます。発達障害という言葉の広がりとともに、以前は子どもの性格や保護者のしつけの問題としてとらえられていたことが発達障害として認知されるようになったこと、また、保育者自身の成長も要因の1つと考えられます。新人の頃はだれもが日々の保育で精いっぱいですが、経験を積んでベテランになると少し引いた位置から一人ひとりの姿をとらえられるようになります。すると、以前は見逃していた子どもの姿に気づくこともあるでしょう。これらの複合により、多くの保育者の間で特別なニーズをもつ子どもへの意識が強くなっているのだと思います。

## 課題は発達障害に関する理解不足と保護者との関係づくり

特別なニーズをもつ子どものサポートに関して、保育の現場が抱える課題は大きく2つあると感じます。1つは、発達障害に対する理解の不十分さです。先ほどから私は発達障害という言葉を使っていますが、これは診断名ではありません。発達障害とは、「自閉症スペクトラム障害」「注意欠陥・多動性障害（ADHD）」「学習障害（LD）」という3つの障害の総称です。それぞれの特性はまったく異なりますから、本来は発達障害という言葉でひとくくりにはできません。複数の障害が合併する例もあって混乱しやすいのは確かですが、まずはそれぞれの違いをしっかりと整理して理解することが出発点となります（図1）。現状ではそうした理解が必ずしも十分ではないままに、発達障害という言葉がひとり歩きして、「どう対応すればいいのかわからない」という漠然とした不安を抱える保育者が多いように感じます。

もう1つの課題は、保護者との関係性です。発達障害に関する知識は保護者によって差が大きく、保育者が子どもに気になる点があると感じても、どう伝えればよいかかわからないというケースが多いようです。また、ほかの子どもの保護者への説明のしかたで悩むケースもあるでしょう。

こうした課題を踏まえ、特別なニーズをもつ子どもの育ちをしっかりと支えながら、保護者の理解を得て良好な関係を築いていくためには、まず園の保育者間で「統合保育」の意義を再確認することが大切だと考えています。

## 多様な子どもが学び合う「統合保育」の意義の再確認を

世界的にも、障害の有無を含めた人間の多様性の中で、共に学び合う「インクルーシブ教育」が重視される流れにあります。これは国連が推進する、さまざまな個性をもつ人が積極的に社会参加できる「共生社会」の実現に向けた大きな動きです。日本では小学校以降は特別支援学級などに進むことで、結果的に分かれていきますが、就学前はインクルーシブ教育に近い統合保育が行われています。

統合保育には大きくいうと2つのよさがあります。

1つは、障害のある子どもにとって、いわゆる定型発達児の姿がよいモデルとなることです。個別に治療や療育が必要な場合もありますが、一緒に過ごす場があれば、ほかの子どもの姿をまねて発達が促されることが証明されています。

もう1つは、ほかの子どもたちにも人間の多様性を受け入れる素地が育つことです。さまざまな障害のあ

図1

# 発達障害

発達障害は以下の3つの障害の「総称」であり、「診断名」ではない

### 自閉症 スペクトラム障害

対人コミュニケーションを苦手とし、こだわりの強さ、言葉の遅れなどの特性があるが、特性の表れ方や症状の重さには個人差が大きい。また、知的障害を抱えるケースもあれば、通常と変わらないケースもある。

### 注意欠陥・ 多動性障害 (ADHD)

不注意、多動性、衝動性といった行動特性がある。特性の表れ方に個人差はあるが、これら3つのすべてが見られるタイプが約80%を占める。子どもの3~5%にADHDがあると考えられ、2対1の割合で男性が多い。

### 学習障害 (LD)

聞く、読む、書く、話す、計算するなどのうち、特定のものの習得と使用に困難を伴う。小学校に入学してから気づくことが多い。一生懸命学習しても効果が表れず、「努力していない」などと誤解されるケースも多い。

る子どもと一緒に過ごすクラスは、いわば小さな共生社会です。そうした環境を普通に感じ、困っている人に自然に手を差し伸べられる感覚を育むことは、これからの時代を生きる上でとても大切になります。保育にかかわる先生方には、特別なニーズをもつ子どもへのサポートを通して、こうした意義のあることに取り組んでいるという自信をもってほしいと思います。

## 自分も仲間の一員という感覚が 自己肯定感を育む

では、保育者は特別なニーズをもつ子どもをどのように支えていけばよいのでしょうか。まず、障害の有無にかかわらず、子どもの健全な発達のためには自己肯定感の醸成が極めて重要です。ところが、発達障害の子どもはその特性が十分に理解されづらいため、叱られたり否定されたりすることが多く、自己肯定感の低下を招きやすい傾向があります。

自己肯定感を育むためにもっとも重要なのは、集

団の中で「自分は受け入れられており、仲間の一員だ」という感覚をもてるようにすることです。多様な子どもが集団生活を送る園という場で、だれも置き去りにしない保育を、ぜひ実現させてください。集団の中で安心して過ごせると、結果的に子どものQOL（クオリティ・オブ・ライフ。生活する上での満足度）も上がっていきます。

互いを認め合う集団づくりは難しそうに感じるかもしれませんが、それは杞憂に過ぎません。子どもは、「この友だちはこういうことが苦手だな」と、障害を個性としてありのままに受け入れ、自然と助け合う関係を築くものです。子ども一人ひとりが自由に発想して、やりたい遊びに没頭できる環境づくりをすると、そうした集団の力が生まれやすくなります。トラブルが生じた場合には介入することも必要になりますが、保育者が子どもを大切に、子ども同士の自由なインタラクションをサポートしていけば、基本的に見守るだけでよい場面が多いでしょう。

## すべての子どもは、それぞれ異なるニーズをもつ

### 障害の種類が同じでも 求められるサポートは個々に異なる

ただし、特別なニーズをもつ子どもは、保育者のサポートがないと、ほかの子どもと同じ体験ができないケースが往々にしてあります。そこで、一人ひとりの違いを踏まえたサポートが必要となります。ここでの保育者の役割は、治療や療育を行うことではなく、集団の中でほかの子どもと同様に生活や遊びを経験して成長できるように配慮することです。

そもそも、それぞれ形は違いますが、固有のニーズはすべての子どもにあります。私が「特別なニーズをもつ子ども」という言葉を使うのは、子どものニーズを大人の側からとらえてサポートをする必要があると考えるからです。例えば、服のボタンが外せないから手伝う、視力が弱いから眼鏡をかけるなどと同じ線の上に、発達障害へのサポートもあると考えましょう。

では、個々の子どもをどうサポートすればよいのでしょうか。これは同じ種類の障害であっても年齢や性別、障害の程度などにより千差万別のため、簡

単にはいきません。同じ障害だからといって、「この子に効果的なので、あの子にもあてはまるだろう」とはいかないのです。まずは障害の特性について一般的な知識を学び、それをもとに個々に試行錯誤していくことが必要になります。

そうした試みのヒントになればと、以前、園や学校に協力を依頼し、現場で効果があつた実践例を状態ごとに整理して『発達障害のある子のサポートブック』という本にまとめました。例えば、「整理出来ない」という状態への対応だけで133もの実践例を掲載しています（**図2**）。サポート法を探す際には、1つの方法に固執せず、うまくいかなければ次の方法を試すという姿勢も大切になるでしょう。

園内研修で一般的な発達障害の知識を取り上げることも意味がありますが、それだけでは目の前の子どもには対応しきれません。一歩踏み込み、実際にどうサポートして、どんな反応が見られたかなどの情報を保育者間で共有・意見交換し、ノウハウを蓄積していくと、より実践的な研修になると思います。



**83 整理出来ない**

- 1 一つ一つ教師と確認しながら、自分のロッカーの中の物をどのように整理すればよいか、本人に合う方法を提示する。
- 2 ロッカー、道具箱の整理をする時間を設けたときに、本人と一緒に片づけ、必要、不要な物を分け、整理していく。本人だけ整理させたり、やり直したりせず、いやな気分させないようにする。
- 3 必要な物とそうでない物を別々に分類する。
- 4 持ち物を少なくしたあと、自分で決めたカテゴリー別に場所や色（シンボル）を決めて別々に片づけさせる。

『発達障害のある子のサポートブック』には、サポートが必要となる13の項目をさらに小項目に分けて、それぞれうまくいった対応が掲載されている。「整理出来ない」は小項目の1つで、ここだけで133もの実践例がある。

※『発達障害のある子のサポートブック』より抜粋

## 保護者に統合保育の意義を伝え一緒に育ちを支える関係づくりを

保護者との関係づくりについても考えてみましょう。

子どもに気になる状態が見られるとき、保護者に「〇〇ちゃんは、△△と思われる症状があるので、専門機関にみてもらったらどうでしょうか」といった伝え方をすると、多くの場合、保護者との関係は悪化する傾向にあります。「この子はこうだ」と決めつけるのではなく、具体的な場面を提示し、「この子はどんなことや場面で困っているか」「園では、そのときどんなサポートを試みたか」を、必要に応じて写真や動画を使って丁寧に説明しましょう。その上で「こういう発達障害の可能性もある。専門機関からの助言を園での保育に生かしたい」と、今後の保育のためであるという目的をきちんと伝えて説明すると、保護者も受け入れやすくなります。

特別なニーズをもつ子どもの保護者は、「園から拒絶されるのではないか」「ほかの子どもと一緒に育てられないのではないか」といった不安を抱きがちで

す。そこで、統合保育の中で多様な子どもが高め合い、成長している姿を伝えるなどして不安を和らげ、一緒に子どもを支える姿勢を示すことが大切です。

そうした関係性ができると、保育者には保護者をサポートしていく役割も生じます。日頃の子どもの姿やできるようになったこと、頑張ったことなどをこまめに保護者と共有していきましょう。子どもの自己肯定感を高める上でも、保護者や保育者がその子のよさを認めて励ますことが欠かせません。

本人以外の子どもの保護者が、わが子への影響を心配することもよくあるものです。そうしたケースでは、日頃からいかに園で統合保育の意義を理解して実践しているかが問われます。保育の方針を明確に伝え、「こんな形で助け合っています」と、実際に子ども同士が高め合っている場面を示しましょう。先入観をもたずに一緒に成長していく子どもたちの姿が伝われば、その意味を理解して一緒に支えてくれる保護者も増えるに違いありません。

## 園内に小さな共生社会をつくる草の根の活動が広がってほしい

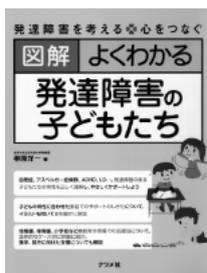
特別なニーズをもつ子どものサポートに関しては、保育現場だけではなく行政側にも多くの課題があると感じます。しかし、理想的な環境が整うまで待つわけにはいきませんから、自分たちのできる範囲でよいので、園内に小さな共生社会をつくる試みを続けてほしいと思います。まずは目の前にいる1人の子どもをいかにサポートするか、そして自分の担当するクラスをいかに高めていくかを考えていきましょう。そうした草の根の取り組みが広がり、やがては日本社会を変えるような大きな流れになっていくことを願ってやみません。

✓CHECK!✓



発達障害への理解を深める

榎原先生の書籍ガイド



『図解よくわかる 発達障害の子どもたち』  
(ナツメ社)

発達障害の種類や特徴、診断や対応法など基本的な知識をイラストを交えてやさしく解説。園や学校でのサポートのあり方についても具体的なケース別に紹介しています。



『発達障害のある子のサポートブック』  
(学研 (Gakken))

保育者や教師が発達障害のサポートを検討する上では、なるべく多くの事例を知ることが大事という観点から、実際に園や学校から効果があったという2800の報告例を、状態ごとに検索しやすい形で紹介しています。

太陽の子保育園（東京都羽村市・私営）

# 「物・システム・人」

## 3つの観点で環境を整え 多様な子どもが共に育つ場を

「障がい」とは子どもと環境との接点で生まれるもの

保育の専門性は  
多様性を受け入れる幅広さにある

太陽の子保育園では、大庭正宏先生が園長に就任した2007年度から、インクルーシブ保育の実践を徐々に進めてきました。大庭先生はその思いを次のように語ります。

「保育の専門性とは何かと突き詰めると、多様な子どもに対応する幅広さではないかと思いました。どんな特性がある子どもでも過ごしやすい環境をつくり、成長をサポートできるのが、保育のプロだと考えたのです。そうした信念をベースに多様性に配慮した環境を整えていく中で、障がいなどの有無にかかわらず、

だれもがのびのび過ごせるという、いわゆるインクルーシブ保育の方針に自然と近づいていきました」

同園では、障がいとは子どもに内在するのではなく環境との接点で生まれるもので、子どもにとっての生きづらさを障がいだととらえています。そうした考え方にに基づき、あらゆる子どもにとって障がいが生じづらい環境の整備に力を入れてきました。

「目の前の子どもが抱えるしんどさをいかに取り除くか、また、小学校への進学後などに困難が予測されるなら今のうちに対応できることはないかといった観点から、環境づくりに取り組んでいます」(大庭先生)



お話ししてくださった  
先生方

太陽の子保育園 園長  
大庭正宏 先生



主任  
坂元美紅 先生

5歳児クラス担任  
薄井理紗 先生



5歳児クラス担任  
渡部あみ 先生

### 3つの観点で環境を見直し だれでも過ごしやすい空間を

同園では園として整えるべき環境には、①物、②システム、③人の3つがあると考えています。

①物的環境面では、既存の施設・設備の中に新たな試みを取り入れ、子どもの反応を確かめるといった試行錯誤を重ねてきました。掲示物を簡素にして視野から外れる場所に貼る、1人で落ち着ける静かで狭いスペースをつくる（リソースルーム）、物の配置を決めて子どもの導線をわかりやすくするなど、さまざまな環境づくりを行っています（P.16 参照）。

「子どもが過ごしやすい環境を整えると、保育者にとっても大きな助けになります。例えば、衝動的になりやすい子どもが自らリソースルームに行き、気持ちが落ち着いてから戻ってくることがあります。それにより、保育者はその子にかかりきりになることなく、ほかの子どものサポートができます。姉妹園では、それまでの物的な環境整備のノウハウを反映させて園舎を設計したところ、開園当初から子どもたちがとても落ち着いて過ごせていることに驚き、環境の重要性を改めて感じました」（大庭先生）

②システムの環境は主に計画づくりに関することで、「無理をさせない」「多くを求めすぎない」という考え方がベースにあります。1日の流れを絵カードなどで示したり、散歩から帰ったあとには5分程度の余裕時間を設けたりするなど、気持ちの切り替えが難しい子どもも緩やかに過ごせる時間配分を心がけています。

年間カリキュラムも、子どもの多様な特性を踏まえて検討します。例えば、5歳児クラスでは小学校就学を見据え、あえてドッジボールのような、ルールがあって勝敗がはっきりする活動を段階的に取り入れていきます。そして、負けたときの気持ちを受け入れながら、「自分もみんなも楽しく遊ぶためには、ルールを守ることが必要だ」と理解していくことを促します。

③人的環境では、保育者の資質・能力の向上と、保育者同士の連携を支える体制づくりが2つの柱です。

「さまざまな研修を通して、発達障害やインクルーシブ保育などの理解を促し、保育者のスキルアップを支えます。その上で、保育者同士が子どもに関して話し合い、情報をシェアして協力・連携する体制をつくるのが実践につながると考えています」（大庭先生）

### 基礎の理解を出発点に 実践的な手法を学ぶ研修制度

同園では、特別なニーズをもつ子どもへのサポートに関する、段階的な研修を設定しています。

「発達障害の特性や基本的なサポートについて理解することが出発点となります。しかし、それだけでは一人ひとりの多様な特性には対応できないため、次の段階としてサポートの引き出しを増やす研修を取り入れています」（大庭先生）

園全体で知識・理解を深めるため、年5回、外部講師からサポートのしかたを学ぶ園内研修を実施し、また、年7回、地域の他園にも呼びかけて合同研修を主催しています。さらに年6回、心理士などの専門家を招いて午前中の保育を見てもらった上で、子どもの午睡中に具体的なサポート手法へのアドバイスを<sup>ひら</sup>ける時間を設けています。主任の坂元美紅先生は次のように話します。

「子ども一人ひとりのニーズが多様な上に、同じ子どもでもその日の状態や環境によって異なる対応が求められることも多く、正解は1つではないとつくづく感じます。そのため、保育者はとにかく多くの引き出しをもっておくことが肝心であり、継続的な研修が不可欠だと考えています」

#### こんなサポートがうまくいった！ 1



運動会の準備でやることの多さに戸惑い、本当は頑張りたいのに落ち着いて取り組めない子どもがいました。どうしたら気持ちを支えられるだろうかと考え、「練習が終わったら『ご褒美タイム』をつくろう」と約束すると、それを目標にその日は頑張ることができました。翌日は子どもの方から「今日も『ご褒美タイム』ある?」と聞いてきて、あることを伝えると、その日も頑張れました。この経験から、子どもが頑張れるように、プラスの気持ちになれる目標を設定するとよい場合もあることを学びました。（渡部先生）

# 園全体で一人ひとりの 子どもを支える体制をつくる

## 保育者同士が支え合う 園内の体制づくりに注力

保育者がチームとして力を発揮しやすい体制をつくることも重視しています。特別なニーズをもつ子どもへのサポートは、保育者が個々に取り組むのは難しいと考えているためです。

「保育者は研修などで学んだ方法を子どもに試しますが、最初からうまくいくケースはほとんどありません。いろいろと試す中で、『少し効果が見られたからアレンジしてみよう』といった試行錯誤が求められますが、それを1人で行うのは困難です。保育者同士が手法を出し合い、話し合っただけで工夫し、手探りで生み出していくこと、かつ、うまくいかなければすぐ次へと切り替えていく柔軟性が必要だと考えています」(大庭先生)

保育者同士の協力体制を支えるため、加配の保育者を入れて、園内の全クラスを2～5人の複数担任制とし、全体をまとめる主任を配置しています。そして、各クラスとも全体を見ながら活動を進めるリーダーと、気になる子どもを個別にサポートするサブの役割に分かれて保育を行います。2人担任の5歳児クラスでは、1週間ごとにリーダーとサブを交代しています。保育歴が先輩の薄井理紗先生はこう説明します。

「どちらの役割も経験する方が個々の子どもに異なる距離から接することができ、状態の把握や適切なサポートへの理解が深まるからです。また、子どもにとっても両方の保育者が安心できる存在になり、何が起こっても臨機応変に対応しやすくなります」

担任同士は、保育中や午睡中、子どもの帰宅後などに情報共有や意見交換を行うほか、月1回、クラス会議を実施し、子どものサポートのあり方について話し合います。ほかにも、主任と担任による会議や各クラスのリーダーが集まる会議、職員会議などを行い、園全体での情報共有に努めています。

「子どもの情報を園全体で共有することで、保育者同士の支え合いが生じ、子どものサポートに広がりが出ます。例えば、散歩に出発する直前にある子どものパニックが収まらないときには、ほかのクラス

こんなサポートがうまくいった!

2



姿勢の保持が難しい子どもに対し、カーペットの下などに敷くすべり止めを切り取り、「魔法の布だよ」と言って、椅子の座面に置くように促しました。すべり止めの効果もありましたが、子ども自身が意識して頑張るようになったことも大きく、長時間、姿勢が保持できるようになりました。給食をこぼして服を汚すことがなくなったため「給食が楽しい!」と、おかわりもしています。友だちに寄りかかって迷惑がられることもなくなり、ストレスの原因が取り除かれて自信がついたせいか、表情がとても明るくなりました。(薄井先生)

の先生に預かってもらうといった対応が、自然にできるようになります」(大庭先生)

日頃から保育者同士の話し合いを大切にすることで、気軽に相談し合える風土が生まれています。保育歴2年目の渡部あみ先生は次のように話します。

「日々のサポートでは悩むことも多いですが、先輩に対して『困っています』『助けてください』と、遠慮なく言える環境にとっても助けられています」

## 「1つ増やしたら1つ減らす」方針で 研修などの時間を生み出す

数多くの研修や会議の時間を生み出すため、同園ではさまざまな工夫を重ねてきました。午睡中の時間を有効活用するほか、「1つ増やしたら1つ減らす」を基本方針として業務改善に取り組んでいます。減らす対象は、不要と思われる会議や書類作成、事務作業などです。例えば、以前は月1回だった職員会議を2か月に1回としたり、発表会の演劇の背景を簡素化したり、手作りしていた制作物をパソコンで作成したりして、時間を生み出してきました。そうすることで、新たな取り組みの導入時に「負担が増えた」と感じられないようにしています。

## 面談時の腰を据えた話し合いで 保護者との関係を深める

子どもの育ちを支えるためには、保護者との関係づくりも重要です。保育の方針や内容への理解を促すため、年2回の保育参観のほか、保護者懇談会の際には日々の活動内容を紹介するビデオを上映しています。

さらに、保護者との関係を深める上で大切なのが保護者面談です。保護者に納得してもらうことを重視して時間では区切らず、長い場合は2時間ほど話し込むこともあるといいます。それは、特別なニーズをもつ子どもの保護者に限ったことではありません。

「面談日に向けて保育記録を読み返し、子どもの姿や成長をまとめ、現在、力を入れているサポートを説明して『ご家庭でも、こんなことに気をつけてください』などとお話しします。子どもの特性について『心配だな』と思う部分を伝えるとショックを受ける様子が見られることもあります。続けて『こんなサポートをすると、こう伸びていくと思います』と、園としてつかんでいる対応をお話すると、『家でも心がけてみます』などと前向きにとらえてくださるケースが多いです」(薄井先生)

その後も、毎日「今日はここに少しつまずいたけれど、ここを頑張れた」など子どもの様子をこまめに共有し、一緒に成長を支える関係づくりに努めています。

## 初めて出会う社会である園で 多様性を認め合う経験を

インクルーシブ保育を実践する中で、保育者の多くが共通して感じているのは、「子どもに助けられることが多い」ということです。子どもたちは一緒に過ごす中で互いの特性を自然と理解して受け入れ、助け合う姿が見られるようになるといいます。

「生活のさまざまな場面で相手の様子を見て手伝ったり、遊びの中で子ども同士の特別なルールを決めて一緒に楽しめるようにしたりしています。また、子どもだけで対応が難しい場合は、『先生、〇〇ちゃ

んが困っているよ』と教えに来てくれて、本当に自然な形でサポートし合う姿が見られます」(坂元先生)

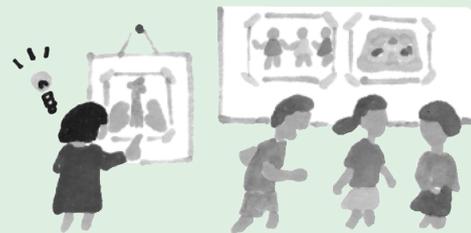
今後も生活や活動を通して、子どもたちが多様性を認め合う経験を大切にしたいと考えています。

「園は子どもが初めて出会う社会であり、その中で多様な存在を認め合う経験を自然なものとして受け入れてほしいと思っています。それがこれからの時代にますます重要になる保育のあり方と考へ、今後も実践を深めていきます」(大庭先生)



### こんなサポートがうまくいった!

3



以前から1日の流れはボードに絵カードで示しており、それに沿って動ける子どもが多いのですが、中には細かい部分まで示さないと動けなかったり、ほかの子どもが一斉に動く姿に戸惑ってしまったりする子どももいます。そこで、もう1つ小さなボードを作り、絵カードでは「散歩」⇒「給食」とする間の「着替えて、トイレに行って、手を洗う」という細かい作業の絵カードも用意して、視覚的にわかるようにしました。すると、最初は自分のマークをつけて1つずつ行動を確認していたのが、しだいに見るだけでわかるようになっていきました。自分で手がかりを見つけ行動する力をつけて、小学校に進んでほしいと考えています。(坂元先生)

#### 取り組みの ポイント

- 物・システム・人の3つの観点から子どもをとりまく環境を見直す
- 保育者同士が情報共有や協力・連携がしやすい体制をつくり、園全体で子ども一人ひとりを支える
- 面談等の細やかなコミュニケーションを通して保護者との固い連携を築く

# 一人ひとりの特性に 配慮した環境づくり

## 1人で落ち着けるリソースルーム

いつでも1人になれる空間としてリソースルームを数か所設置しています。最初は段ボールハウスから始まったリソースルームですが、階段の踊り場についでを置いた簡易的なものから、教室の押し入れを改造したり、空きスペースに壁を取りつけたりしたものまで、既存の空間を有効活用しています。



## 1日の流れを絵カードで示す



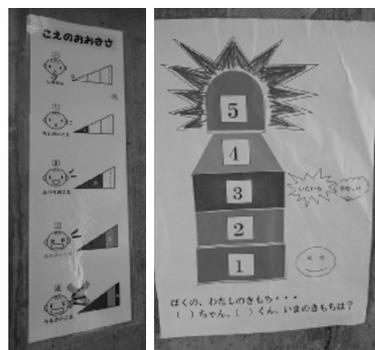
ボードに1日の流れを絵カードで示し、言葉の情報だけでは理解しづらい子どもが見通しをもてるようにしています。次に何をするかを自分で考えて、行動できるようになってほしいという願いも込めています。

## 時間の経過を視覚的に示す



向かって右側の時計は、色のついた部分のスペースが徐々に狭くなり、残り時間が少なくなっていくことを視覚的に示しています。普通の時計では時間の感覚がつかみづらい子どもに配慮しています。

## 気持ちや声の大きさを 図やイラストで示す



自分の気持ちや声の大きさなどを表すときに、イラストやグラフ状のものを使って示すことで、言葉で説明するのが苦手だったり、相手の様子がわからなかったりする子どもが、互いの気持ちや状況を理解できるようにしています。

## 音の刺激に敏感な 子どもへの配慮



音の刺激に敏感な子どものために、音を遮断するイヤホンを教室内に設置。だれでも自由に使うことができ、パズルなどの1人だけの活動に集中したいときに使用する子どももいます。

## 落ち着いて座ってられない 子どもへの配慮



感覚的な特性により落ち着いて座ってられない子どもの中には、体に適度な刺激を与えると長く座っていただけるケースもあります。椅子の背もたれにテニスボールを取りつけ、座ったときに刺激を感じられるようにするなど、子どもの様子に合わせて工夫しています。



社会福祉法人陽光福祉会  
太陽の子保育園

2001年開園。理念は「子どもの健やかな成長を援助する」。多様な子どもの受け入れや地域の家族援助、近隣の園との交流を活発に行っている。

◎ 園長：大庭正宏先生  
◎ 所在地：東京都羽村市五ノ神 3-15-7  
◎ 園児数：124人(0~5歳) ※一時保育等含む